

国立国語研究所学術情報リポジトリ

述語補文について：日本語とインドネシア語の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): NP-complement, VP-complement, S deletion, accusative-with-infinitive constructions 作成者: 正保, 勇, SHOHO, Isamu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001114

述語補文について

—日本語とインドネシア語の場合—

正 保 勇

要旨：Peter S. Rosenbaum (1967) によれば、次の二文は、表面上は同じ構造を成しているように見えるが、深層においては、その補文の構造を異にしているという。

- (1) We wanted the doctor to examine John.
- (2) We compelled the doctor to examine John.

即ち、want は、それに続く ‘the doctor to examine John’ 全体が抽象的な代名詞 ‘it’ を主名詞とする名詞句補文を成しているのに対して、compel は、‘the doctor’ が主文の目的語で、その後に続く to 不定詞句が VP に直接支配される動詞句補文を成している。そして、次の例のような、believe が作る対格付き不定詞構文（以後これを B型構文と呼ぶ。）は、want が作る構文（以後これをW型構文と呼ぶ。）と、compelが作る構文（以後これをC型構文と呼ぶ。）との両方の性格を併せ持っている。Rosenbaum によれば、believe の持つこのような中間的な性格は、最初名詞句補文であった believe の補文が、派生の途中の段階で、compel が取る補文と同じ動詞句補文へと変わるためであるという。名詞句補文の存在を認めるかどうかという問題はさておくとしても、英語の対格付き構文には三種類があるということは明らかである。本論においては、インドネシア語における対格付き不定詞構文を、英語の B型、C型、W型構文と比較すると同時に、日本語の補文との比較も併せて行う。

キーワード：名詞句補文、動詞句補文、こと、ように、と

Abstract: In his book titled “The Grammar of English Predicate Complement Constructions”, Peter S. Rosenbaum has proposed that superficially similar ‘accusative-with-infinitive’ constructions can be classified into three groups, viz., want-type constructions (henceforth W-type), compel-type constructions (henceforth C-type), and believe-type constructions (henceforth B-type). B-type constructions show characteristics intermediate between W-type and C-type ones with respect to some syntactic and semantic criteria instrumental in distinguishing between NP-complements and VP-complements. He explained the intermediate nature of B-type constructions by assuming them to take NP-complements at deep structure, which changes into VP-complements afterwards, in the course of their derivation. Putting aside the validity of the postulation of NP-complement, it cannot be denied that three types of ‘accusative-with-infinitive’ constructions can be recognized in English.

This study aimed at comparing Indonesian ‘accusative-with-complement’ constructions with B-type, C-type and W-type constructions in English, with occasional reference to the study of Japanese predicate complements, especially the one by Minoru Nakau. It was found that constructions equivalent to B and C-types can be found in Indonesian, where \bar{S} deletion is necessary as well in Indonesian as in English.

Key words: NP-complement, VP-complement, \bar{S} deletion, accusative-with-infinitive constructions

1. 英語における名詞句補文と動詞句補文

次の二つの構文は、通常「不定詞付き対格」(‘accusative with infinitive’)と呼ばれるもので、一見すると同じ構造を成しているように見える。

(1) We wanted the doctor to examine John.

(2) We compelled the doctor to examine John.

しかし乍ら、この二つの構造は、表面上の類似にも拘らず、統語的にも、意味的にも幾つかの相違を示すことが知られている。次に、それらの相違について観てみることにする。先ず第一に、want の不定詞付き対格構文においては、その補文が受身文になつても、補文が能動文の場合と、意味の相違が認められない。つまり、次の文は先程の(1)と同義である。

(3) We wanted John to be examined by the doctor.

これに対して、compel の不定詞付き対格構文においては、補文が能動文の場合と受動文の場合とでは、意味に相違が生じる。つまり、次の文は先程の(2)とは同義ではない。

(4) We compelled John to be examined by the doctor.

(2)では、強制されたのは医者であるが、(4)では、強制されたのはジョンの方である。

第二の相違は、文法的形式素の there が不定詞の前に現われるかどうかに関係するものである。次に見られるように、want は there を不定詞の前に取ることができるのでに対して、compel はそのような形を許さない。

(5) We wanted there to be three chairs.

(6) *we compelled there to be three chairs.

第三に、両構文は、主語と同一指示的である補文中の名詞句の削除の可能性に関しても相違を示す。次の例に見られるように、want は同一名詞句の削除が許されるが、compel は同一名詞句の削除が許されない。

(7) We wanted to examine John.

(8) *We wanted ourselves to examine John.

(9) *We compelled to examine John.

第四に, want と compel は, 対格に再帰代名詞を取ることができるかどうかという点に関して相違を示す。次に見られるように, want は対格に再帰代名詞が現われることができないのに対して, compel の方は, そのようなことができる。

(10) *We wanted ourselves to examine John. (但し ourselves は無強勢)

(11) We compelled ourselves to examine John.

第五に, 両構文は, 対格名詞を主語に立てた受動構文の成立の可能性について相違を示す。want 構文においては, (10) のように, 対格名詞を受動構文の主語にした形は不可能である。これに対して, compel 構文においては, (13) のように, 対格名詞を受動構文の主語にした形が可能である。

(12) *The doctor was wanted to examine John.

(13) The doctor was compelled to examine John.

第六に, 両構文は, 補文の外置可能性に関して相違を示す。want 構文は, (14) に見られるように, 補文が元あった位置に形式的な代名詞を残して, 構文を外置させることが可能である。これに対して, compel 構文は, (15) に見られるように, 補文を外置した形は許されない。

(14) We wanted it very much for the doctor to examine John.

(15) *We compelled it very much for the doctor to examine John.

最後に, 両構文は, 補文が分裂文の焦点の位置に現われるかどうかに関して相違を示す。want 構文は, (16) に見られるように, その補文が分裂文の焦点に現われる形が可能である。これに対して, compel 構文は, (17) に見られるように, そのような形が不可能である。

(16) What we wanted was for the doctor to examine John.

(17) *What we compelled was for the doctor to examine John.

Rosenbaum (1967)においては, この両構文の統語的・意味的相違を説明するのに, want が取る補文と, compel が取る補文とは相異なるものであるという提案をしている。即ち, want が取る補文は (18) に現われる that

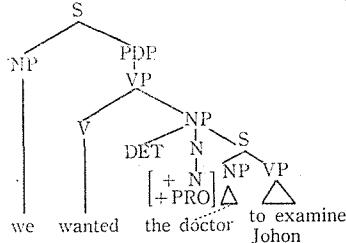
補文と同じ名詞句補文であるのに対して, *compel* が取る補文は (19) に現われる *to* 補文と同じ名詞句補文であるという。

(18) I [VP [V think] [NP [N it] [S that John is leaving]]]

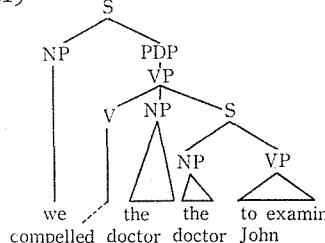
(19) The doctor [VP [V condescend] [S to examine John]]]

名詞句補文は NP に直接支配される補文であるのに対して, 動詞句補文は VP に直接支配される補文である。この二種類の補文の区別に基づいて, (1) と (2) を図示すれば, それぞれ (20) と (21) のようになる。

(20)



(21)

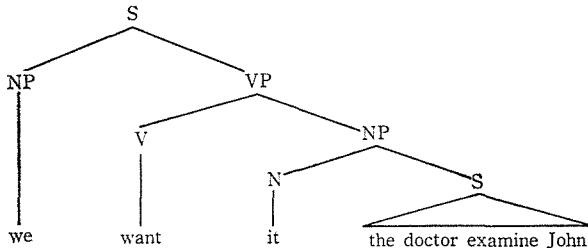


Rosenbaum は, *want* が取る名詞句補文の主名詞 (head noun) の部分に, 抽象的な代名詞である *it* が深層構造では充填されていると考えている。この抽象的な代名詞の存在は, 前述の (14) のように補文が外置された構文において *it* が現われるという事実によって裏付けられる。そして (1) のように外置変形が掛らなかった文においては, 派生の途中の段階でこの抽象的な代名詞は削除されると考えられる。Rosenbaum によれば, 先に述べた, *want* 構文と *compel* 構文の統語的・意味的相違は, 全てそれぞれの動詞が取る補文の相違に由来するのであるという。

want の取る補文と *compel* が取る補文とが相異なるものであると仮定することによって, 先に述べた両構文の間に見られる相違に対する説明が与えられることになる。例えば, *want* 構文では, 補文が受文となつても, 元の能動文との間に意味の違いが生じないことを見たが, これは, (1) も (3) も共に (22) で示されるような共通の深層構造から派生したためである。そして, (3) の文は, 派生の途中の段階において, 補文に受動変形が掛るこ

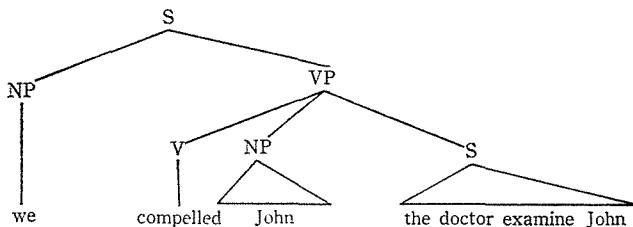
とにより生じた。変形は意味を変えないのが原則であるので、結局、補文内が能動文であっても、受動文であっても、全文の意味には違いが生じないのである。

(22)



これに対して、(4) の深層構造は次のようにあり、これは、(22) とは異なる構造をしているので、(2) と (4) との間に同義関係が成立しないのは当然である。

(23)



(1) と (3) が同義であるのは、ちょうど次の二つの文が同義であるのと同様である。この両文において異なっているのは、目的格補文内が能動文であるか、受動文であるかという点においてのみである。そして、前にも述べたように、受動変形は意味を変えないので、両文は同義となる。

(24) I believe John has convinced Bill.

(25) I believe Bill has been convinced by John.

次にここに使われている *believe* という動詞を、これまで述べてきた *want* と *compel* と比較してみることにする。*believe* という動詞は、今述べた二

つの例に見られるように、 that 補文を取るが、 次のように不定詞付き対格構文も構成する。

(26) We believed the the doctor to have convinced John.

そして、 この文は、 補文に受動変形を掛けた次の文と同義となる。

(27) We believed John to have been convinced by the doctor.

これは、 want 構文との類似を示している。更に又、 次の例が示すように、 there を対格として取るという点においても、 want 構文との共通性を示している。

(28) We believed there to be three chairs.

しかし乍ら、 1) 同一名詞句の削除の可能性、 2) 対格名詞を主語とする受動構文の可能性、 3) 対格の再帰代名詞の出現可能性、 4) 補文の外置の可能性、 5) 補文が疑似分裂文の焦点になる可能性に関しては、 逆に、 compel 構文のパラダイムとの類似を示す。次に believe が上記五つの変形に対して示すパラダイムを掲げる。

(29) *We believed to have convinced John. (同一名詞句の削除)

(30) The doctor was believed to have convinced John.

(受動変形)

(31) We believed ourselves to have convinced John. (再帰化)

(32) *We believed it firmly for the doctor to have convinced John. (外置)

(33) *What we believed was for the doctor to have convinced John. (疑似分裂文)

この五つの変形に対して示す believe のパラダイムは、 次の compel が同様の変形に対して示すパラダイムと重なり合う。

(34) *We compelled to examine John. (同一名詞句の削除)

(34) The doctor was compelled to examine John. (受動変形)

(36) We compelled ourselves to examine John. (再帰化)

(37) *We compelled it very much for the doctor to examine

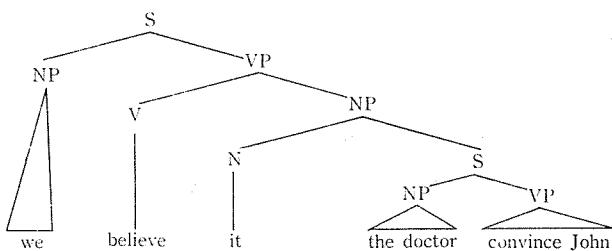
John. (外置)

- (38) *What we compelled was for the doctor to examine John.
(疑似分裂文)

Rosenbaum (1967) では, believe がこのように, want が持つ特徴と, compel が持つ特徴とを併せ持つのは, 基底構造では want と同じく名詞句補文を取る believe 構文が, It 置き換えという変形操作を受けることにより, compel と同じく動詞句補文を取る構文へと変換されるからであると考えた。believe の構文が, want 構文と同じ構造から, compel 構文と同じ構造へと転換される様子を観てみよう。次の (39) の基底構造は (40) のようであると考えられる。

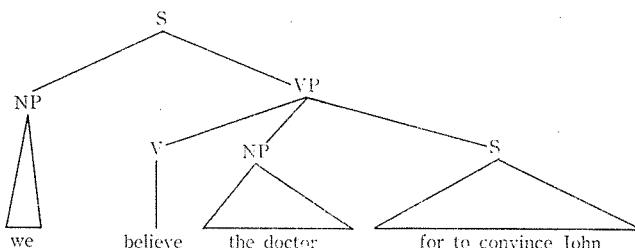
- (39) We believed the doctor to have convinced John.

(40)



この補文に補文標識 for-to を配置したあと, 補文が VP の右に付加される。その後で, 'it' が補文内の名詞句である 'the doctor' によって置き換えられると, 次の (41) によって示される構造が得られる。

(41)



更に, for と to との間に何の名詞句もない場合に for が削除される変形が掛って表層構造に到る。

しかし乍ら, Rosenbaum のように補文を名詞句補文と動詞句補文の二種類に分ける立場に対しては, Lakoff (1970) や, Emonds (1970) 等からの反論がある。Lakoff は, 動詞句補文を認めず, 動詞句補文と呼ばれているものは, [NP It S] のような構造をもつ名詞句補文であるという主張をしている。又, Emonds は, すべての that 節および不定詞が名詞的な性格を有していないとし, これらを全て動詞句補文としている。しかし乍ら, Lakoff や Emonds の主張にも拘らず, 補文には, 名詞的な性格を有するものとそうでないものとの二種類があることは否定できない。例えば, that 節は, 名詞句と同様に, 目的語繰り上げ変形や, 話題化変形を受けることができる。次例を参照されたい。

(42) That his analysis is inadequate is easy to demonstrate.

(43) That his analysis is adequate, we can hardly demonstrate.

しかし乍ら, 不定詞のうち, Rosenbaum が動詞句補文と呼んでいるものは, 次のように, 上記の二変形を受けることができない。

(44) *To help his wife is not easy for John to condescend.

(45) *To help his wife, John condescended.

又, want の補文が名詞句補文であるかどうかの議論は別としても, want の補文と compel の補文とは先に述べたように, 幾つかの変形操作に対して, 相反する振る舞いをするということは否定できない。そして, want と compel の二つの極の間に位置しているのが believe であると言える。Chomsky (1981) においては, want 型補文と, compel 型補文との間に区別はなく, 共に S と \bar{S} を有している。それに対して, believe の型補文には最大投射の \bar{S} を削除する操作がなされるために, S のみを有する補文となる。従って, believe が名詞句補文であるかどうかという議論はさておくとしても, believe 補文が, want 補文や compel 補文とは異なる性格を有しているということは, Chomsky (1981) におけるこの補文に対する取り扱

いからも明らかである。次章では、中右実（1973）で述べられている、日本語における名詞句補文と、動詞句補文の区別について概観し、第三章において、インドネシア語の補文にも、名詞的な振る舞いをするものがあることを見ると同時に、それ以外の補文を、英語の *want* 型（以後これを *W* 型と呼ぶ。）補文、*compel* 型（以後これを *C* 型と呼ぶ。）補文、*believe* 型（以後これを *B* 型と呼ぶ）補文との比較において眺める。

2. 日本語における名詞句補文と動詞句補文

中右実（1973）においては、日本語には二種類の補文があるとの主張がなされている。中右は、常に名詞を従えて使われる補文子の「という」を名詞句補文を構成する補文標識であると規定している。そして、この「という」という補文子を含む補文とそれに続く主名詞が幾つかのクライテリオンに関して示す振る舞いが、「こと」、「の」、「ところ」のグループの補文に見られるそれと一致するところから、この三つの補文子によって構成される補文を名詞句補文であるとしている。そして、同じクライテリオンに対して、先程のグループの補文とは異なる特徴を示す補文を動詞句補文としている。動詞句補文を構成する補文子として、中右は「と」と「よう（に）」を挙げている。中右は先ず、名詞句に働く変形として、1) 主題化変形、2) 分裂文変形、3) 同一名詞句削除変形、4) 代名詞化変形、5) 受動変形（中右は Subject-Object Inversion という用語を使っている。）の五つを挙げている。次に中右が挙げている各変形の例を示す。各文の b は、a に上記の各変形が掛った形を表わしている。

- (46) a. ブルータスがシーザーを殺した。
b. シーザーは、ブルータスが殺した。（主題化変形）
- (47) a. 太郎がテレビで喜劇を観た。
b. 太郎がテレビで観たのは、喜劇だ。（分裂文変形）
- (48) a. 太郎はテレビを観た。次郎はテレビを観た。
b. 太郎はテレビを観た。次郎も観た。（同一名詞句削除変形）
- (49) a. 太郎は、今夜台風が来るだろうという予報を忘れていた。次

郎は、今夜台風が来るだろうという予報を忘れていた。

- b. 太郎は、今夜台風が来るだろうという予報を忘れていた。次郎もそれを忘れていた。（代名詞化変形）

- (50) a. 警官が学生を殴った。

- b. 学生が警官に殴られた。（受動変形）

中右は、これらの、名詞句（「という」に名詞が付いた形を含む）を変形のターゲットにする変形が、「の」、「こと」、「ところ」の三つの補文子によって構成される補文にも同様に適用できる事実から、この三種類の補文が孰れも名詞句補文であると主張している。これらの補文に前述の変形が掛った例を次に掲げる。例は全て中右（1973）からのものである。

- (51) a. 鯨が哺乳動物であるのは、子供でも知っている。

- b. *子供でも知っているのは、鯨が哺乳動物であるのだ。

- c. 大人は、勿論鯨が哺乳動物であるのを知っているが、子供でも知っている。

- d. 大人は、勿論鯨が哺乳動物であるのを知っているが、子供でもそれを知っている。

- e. 鯨が哺乳動物であるのは、子供にでも知られている。

- (52) a. 秘密が漏れた事は、太郎が告白した。

- b. 太郎が告白したのは、秘密が漏れたことだ。

- c. 次郎は、秘密が漏れた事を告白した。太郎も告白した。

- d. 次郎は、秘密が漏れた事を告白した。太郎もそれを告白した。

- e. 秘密が漏れたことは、太郎によって告白された。

- (53) a. 野郎が車を盗むところは、警官が捕えた。

- b. 警官が捕えたのは、野郎が車を盗むところだ。

- c. 学生は、野郎が車を盗むところを捕えた。警官も捕えた。

- d. 学生は、野郎が車を盗むところを捕えた警官もそこ（のところ）を捕えた。

- e. ?野郎が車を盗むところは、警官に捕えられた。

名詞に対して適用可能である変形が一部適用できない場合もあるが、上記の変形に対して名詞が示すパラダイムと、今ここに掲げたパラダイムとはほぼ重なり合うと言える。従って、「の」、「こと」、「ところ」によって作られる補文は名詞的な性格の補文であると言える。

それに対して、「と」、「ように」は、上記変形に対して、次のように、名詞的な補文とは異なるパラダイムを示す。

- (54) a. もう春が来たとは、僕は（が）思った。
b. *僕が思ったのは、もう春が来たとだ。
c. ?*太郎は、あなたが来ないだろうと言っていた。花子もφ言っていた。
d. *太郎は、あなたが来ないだろうと言っていた。花子もそれを言っていた。
e. *もう春が来たとは（が）僕に思われた。
- (55) a. *早く寝るようには、医者が次郎に勧めた。
b. ?*医者が次郎に勧めたのは、早く寝るようだ。
c. ?*両親は、太郎に学校を休まないように説得した。先生も太郎にφ説得した。
d. *両親は、太郎に学校を休まないように説得した。先生もそれを説得した。
e. *早く寝るようには（が）医者によって次郎に勧められた。

そして、(54)d. 及び (55)d. における代用表現の「それ」は、次のように、「そう」で置き換える必要がある。

- (56) 太郎は、あなたが来ないだろうと言っていた。花子もそう言っていた。
(57) 両親は、太郎に学校を休まないように説得した。先生もそう説得した。

以上観てきたように、日本語においても、名詞的な性格を有する補文と、そうでない補文とが存在する。そして、この二種の補文の相違は、これらと置

き換えられる代用表現の相違に反映されている。

3. インドネシア語の補文

インドネシア語の補文を、その補文標識の種類によって分けると次の五つになる。1) *bawa* によって導かれる補文, 2) *untuk* によって導かれる補文, 3) *agar* によって導かれる補文, 4) *supaya* によって導かれる補文, 5) 補文子がゼロのもの。次にこれらの補文標識の例を一つづつ掲げる。

- (58) Saya menyadari bahwa kejahatan akhirnya akan mendapat ganjarannya yang setimpal.
私 知っている ～こと 悪事 最後には Prospective
得る その報い 相応の
(悪事は、最後にはそれ相応の報いを受けることになるということを私は知っている。)
- (59) Kartini berusaha untuk mewujudkan cita-citanya.
努力す る実現させる 理想
(カルティニは理想を実現すべく努力した。)
- (60) Sebelum Sultan Said wafat beliau telah mengamanatkan agar digantikan oleh Muhammad Bakir. (A. Dasuki, *Nuku, Pahlawan dari Tidore*, p. 39)
～前に 王 逝去する その方 Perspective 言い残す
取って代わられる ～によって
(サイド王は、亡くなる前に既にムハマッド・バキルが自分の跡を継ぐようにと言い残していた。)
- (61) Saya doakan supaya kamu menang nanti.
私 祈る 君 勝つ 将来
(私は君が将来勝利を収めることを祈っている。)
- (62) ...Bu Nasti minta Lastri menghubungi polisi. (Mira W., *Perisai Kasih yang Terkoyak*, p. 57)
頼む 連絡する 警察
(ナスティ先生はラストゥリに警察へ連絡をとるように頼んだ。)

次節においては、これらの補文子によって導かれる補文が1) 名詞的であるか否か, 2) *want* 型 (以下これを W 型と略記する。), *compel* 型 (以下これを C 型と略記する。), *believe* 型 (以下これを B 型と略記する。) のうち

の孰れのタイプの動詞と共に現れるかについて観ることにする。

3. 1. *bahwa* 補文

bahwa によって導かれる補文は、日本語の「～事」に相当する意味を表わし、統語的にも名詞的な性格を持った補文であると言うことができる。例えば、次の例が示すように、名詞句をターゲットにする変形の幾つかと同じ変形をこの補文に対して掛けることができる。文末の丸括弧内は、適用された変形の種類を示している。

(63) Bahwa kejahatan akhirnya akan mendapat ganjaran
惡事 最後には Prospective 得る 報い

yang setimpal, seharusnya disadari orang. (受動変形)
Ligature 相応の すべきである 知られる 人(によって)

(悪事が最後にはそれ相応の報いを受けるだろうという事は心得ているべきである (lit.悪事が最後にはそれ相応の報いを受けるだろうということは、人に知られているべきである。))

(64) Bahwa kejahatan akhirnya akan mendapat ganjaran
惡事 最後には Prospective 得る 報い

yang setimpal, seharusnya orang menyadarinya.
Ligature 相応の すべきである 人 それを知る

(主題化変形)

(悪事が最後にはそれ相応の報いを受けるだろうという事は、人はそれを心得ているべきである。)

(65) Yang seharusnya disadari orang adalah bahwa
Ligature すべきである 知られる 人によって ～である

kejahatan akhirnya akan mendapat ganjaran yang
惡事 最後には Prospective 得る 報い Ligature

setimpal. (分裂文変形)
相応の

(人が心得ているべきことは、悪事は最後には相応の報いを受けるだろうということである。)

(66) Saya menyadari bahwa kejahatan akhirnya akan
私 知っている 悪事 最後には Prospective

mendapat ganjaran yang setimpal. Seharusnya φ kamu
得る 報い Ligature 相応の べきである 君

sadari juga. (同一名詞句削除変形)
知る も

(私は、悪事が最後には相応の報いを得るだろうということを知っている。君も知るべきである。)

(67) Saya menyadari bahwa kejahatan akhirnya akan mendapat ganjaran setimpal. Seharusnya kamu juga menyadarinya. (代名詞化変形)
私 知っている 悪事 最後には Prospective
得る 報い 相応の すべきである 君 も
それを知る

(私は、悪事が最後にはそれ相応の報いを受けるだろうということを知っている。君もそれを知るべきである。)

ここでは、中右が名詞句補文であるかどうかを判定する際に用いた五つのクライテリオンの全てに対して、bahwa 構文は名詞句と同じ振る舞いをしている。名詞句も、この五つの変形を受けることは、bahwa 補文を hal itu (その事) という名詞句で置き換えた次の文を見ればわかる。

(68) Hal itu seharusnya disadari orang
こと その すべきである 知られる 人(によって)

(その事は心得ているべきである。(lit. その事は人によって知られるべきである。))

以上のことから、bahwa 補文が名詞的な性格を有していることは明らかである。次にこの bahwa 補文の中の要素を空である主題の位置に繰り上げる変形の可否について観てみることにする。

英語では、次の例に見られるように、名詞的な性格を持った that 補文からの繰り上げ変形は許されないが、to 補文からの繰り上げ変形は許される。

(69) *Mary_i seems [s that [s t_i was killed by John]].

(70) Mary_i seems [s [s t_i to have been killhd by John]].

インドネシア語においても、英語の場合と同様に、that に相当する補文子の bahwa からの繰り上げ変形は許されない。次の例がそのことを示している。

(71) *Belakangan ini produksi film kelihatannya bahwa t_i
最 近 生産 映画 ～に見える
meningkat lagi.
増す 又

(最近、又、映画の製作が増加しているように見える。)

もし、補文子がゼロであれば、補文内からの繰り上げが可能となる。次例は、補文内にあった ‘produksi film’ を主題の位置に繰り上げた文であるが、これは文法的な文である。

(72) Belakangan ini produksi film kelihatannya meningkat lagi.
このように、空の主題の位置への繰り上げが可能となるためには、補文子がゼロでなければならないことが分かったが、もし何の要素に対しても繰り上げ変形が掛らない場合には、逆に、次の例のように、 *bahwa* が必要となってくる。

(73) Belakangan ini kelihatannya bahwa produksi film meningkat lagi. (J. P. Sarumpaet & H. Hendrata, *Modern Reader in Bahasa Indonesia* Book 2, p. 11)

同じことが、*ketahuan* (知られる、分かってしまう) や *terkenal* (知られている) についても言える。この両語は後に補文を従える時には、次のように *bahwa* 補文子に導かれる補文を必要とする。

(74) Ketahuan bahwa ular itu akan membunuh seekor anjing.
知られる 蛇 その Imminent 殺す 一匹の
犬

(その蛇が一匹の犬を殺そうとしているのが発見された。)

(75) Terkenal bahwa ia sangat kejam terhadap rakyatnya.
知られている 彼 非常に 苛酷な ～に対して その人民
(彼が人民に対して非常に苛酷であることが知られている。)

しかし乍ら、補文内からある要素を空である主題の位置へ繰り上げる場合は、次の例のように、補文子がゼロでなければならない。

(76) Ular itu ketahuan akan membunuh seekor anjing.

(77) Ia terkenal sangat kejam terhadap rakyatnya.

同じように *bahwa* 補文を取る動詞 *membuktikan* (立証する, 証明する) がある。この動詞は、後ろに補文を従える際には、次のように、*bahwa* 補文であっても、補文子がゼロであっても構わない。

(78) Pengusut itu membuktikan bahwa Amin mencuri intan itu.
検事 その 盗む 宝石 その
(検事は、アミンがその宝石を盗んだことを立証した。)

(79) Pengusut itu membuktikan Amin mencuri intan itu.

しかし乍ら、次のように、主題の位置が空である場合には、上の (78) と同様に、補文が右に来ていても、*bahwa* が必要となる。

(80) Dapat dibuktikan bahwa Amin mencuri intan itu.
できる 立証される 盗む 宝石 その
(アミンがその宝石を盗んだことは立証することができる。)

又、次のように、補文が受動文の主語の位置を占める場合にも *bahwa* が必要である。

(81) Bahwa Amin mencuri intan itu dapat dibuktikan.

以上のことから、(80) の場合に *bahwa* が必要であるのは、(80) が (81) から派生したことによる起因と考えられる。即ち、(81) の主格補文を外置させることにより (80) が生じたと考えられる。そして、もし (80) の文の *bahwa* 補文子がゼロとなれば、前に述べた *ketahuan*, *kelihatan*, *terkenal* と同様に、補文内からの繰り上げが可能となる。次の例がそのことを示している。

(82) Amin dapat dibuktikan mencuri intan itu.

(アミンはその宝石を盗んだことが立証され得る。)

しかし乍ら、補文に受動変形を施し、その主語である *intan itu* を空である主題の位置に繰り上げた次のような形は許されない。

(83) *Intan itu dapat dibuktikan dicuri oleh Amin.

これに対して、次の (84) は、補文内の能動文の主語を繰り上げた (85) 以外に、補文内の受動文の主語を繰り上げた (86) も可能である。

(84) Siti mengira Anita mencuri cincinnya.
思う 盗む 彼女の指輪

(シティはアニタが自分の指輪を盗んだのだと思った。)

- (85) Anita dikira Siti mencuri cincinnya.
 思う 盗む 彼女の指輪

(アニタはシティの指輪を盗んだとシティによって考えられた。)

- (86) Cincin Siti dikiranya dicuri oleh Anita.
 指輪 彼女によって考えられる 盗まれる ～によって

(シティの指輪はアニタによって盗まれたとシティによって考えられた。)

従って、補文内の受動文の主語の繰り上げが許されるかどうかは、個々の動詞によって異なるように思われる。(83) が許されない理由の一つには、membuktikan が単一の名詞を目的語として取る用法があるために、次のような文と同一視されるという事が挙げられる。

- (87) Tuduhannya itu harus dapat dibuktikan.
 彼の告訴 その ～すべき ～できる 立証される

(その彼の告訴は立証することができなければならぬ。)

即ち、繰り上げられた要素は、(87) における ‘tuduhannya itu’ のように、受動文の主語と同一視されるので、繰り上げ変形の結果、後に残された要素との連関が断ち切られることになる。

インドネシア語の ‘kelihatan bahwa’ に対応する日本語の表現としては、‘～ように見える’ を挙げることができる。日本語の表現は、インドネシア語の場合とは異なり、動詞句補文を取っており、その補文内の要素を主文の主題として取り出すことは自由であるように思われる。次の (89) は、(88) の補文中の要素である「未成年者による犯罪」を主文の主題として立てた文である。

- (88) 近年未成年者による犯罪が増加しているように見える。

- (89) 近年未成年者による犯罪は、増加しているように見える。

又、インドネシア語の ‘terkenal bahwa’ に対しては、日本語の ‘～ことが知られている’ が対応する。こちらの方は、名詞句補文を取るが、補文内の述語が動作を表わす動詞である場合には、補文中の主語を主文の主題として立てることはできないようである。例えば、次の (90) の補文から「彼」

を取り出して主題にした (91) は、認められない。

(90) 彼がその仏像を作ったことが知られている。

(91) *彼は、その仏像を作ったことが知られている。

次の (92) の補文中にも動詞が用いられているが、こちらの方は、先程の例とは異なり、動詞が恒常的状態を表わしている。そして、このような場合には、(93) のように、補文中の主語を主文の主題に立てることができる。

(92) 中曾根首相が英語が堪能であることが知られている。

(93) 中曾根首相は、英語が堪能であることが知られている。

補文中の述語が形容詞、形容動詞、名詞の場合も、今の例と同様に、補文中の主語を主題として取り出すことができる。(95) は、(94) の補文中の「その薬」を主題として取り出したものであるが、この文は適格な文である。

(94) その薬が癌の治療に有効であることが知られている。

(95) その薬は、癌の治療に有効であることが知られている。

又、(90) の補文から主語を主題として取り出した (91) は、不適格な文であったが、次のように、目的語を主題として取り出した文は適格となる。

(96) その仏像は、彼が作ったことが知られている。

又、(91) を次のように変えれば、適格な文となる。

(97) 彼は、その仏像を作ったことで知られている。

3. 2. untuk 補文

untuk 補文標識は、その後に主語を伴う文を従えることはない。例えば、次のような文は非文となる。

(98) *Paman saya berusaha untuk anak-anak mendapat pelajaran
叔父 私の 努力する 子供達 得る 授業

bahasa Belanda.
言語 オランダ

(私の叔父は、子供達がオランダ語の授業を受けられるように努力した。)

この文における untuk を、次節で述べる補文標識の agar 或は supaya で置き換えれば、文法的な文になる。つまり、後者の二つの補文子は untuk とは異なり、その後に主語を伴った文を従えることができる。又、次の文は、

untuk の後に主語が現れているように見えるが、この場合の *ku-* は接頭辞であり、常に動詞と結合した形で用いられるので、主語とは異なり、動詞の一部を成していると考えられる。

(99) Kambing aku pelihara untuk kuambil susu.
山羊 私 飼う 私が取る 乳

(乳を搾るために私は山羊を飼っている。)

つまり、*untuk* 補文の主語は、PRO であって、文中のある要素と同一指示的になるか、随意的な解釈を許すかの孰れかの解釈を受ける。例えば、次の文では、PRO は主文の目的語である ‘saya’ によってコントロールされる。

(100) Pak guru menyuruh saya untuk membaca buku itu.
先生 命令する 私 読む 本

(先生は私にその本を読むように命令した。)

menyuruh という動詞は、次のような文が非文になることから、英語の *compel* 型の動詞に似ていると考えられる。

(101) *Pak guru menyuruh buku itu untuk saya baca.

そして当然のことであるが、*menyuruh* の目的語である ‘buku itu’ を主文の主題にした次の文も非文になる。この点でも、このインドネシア語の動詞は C 型の動詞との類似を示す。

(102) *Buku itu disuruh Pak guru untuk saya baca.

しかし乍ら、次のような文は許容される文であるので、これまでの結論に対する反例を成しているように見える。

(103) Dongeng-dongeng tanah Banten disuruhnya untuk
伝説 地 彼によって命令される
disalin ke dalam bahasa Belanda.
翻訳される ～へ 中 言語 オランダ

(バンテンの地に伝わる言い伝えはオランダ語に翻訳されるよう
に彼によって命令された。)

しかし乍ら、この文は次のように変えることができないことから、B型の構文ではないことが分かる。

(104) *Dia menyuruh dongeng-dongeng tanah Banten untuk

disalin ke dalam bahasa Belanda.

それでは、(103) の文はどのようにしてできたのであろうか。(104) の例で見たように、この場合の ‘menyuruh’ は、対格と補文を従える構造、即ち、C型の構文を構成しているのではないことは明らかである。‘menyuruh’ は次の例のように、主語が任意の解釈を受ける PRO となっている補文を取ることができるので、(103) の文における *untuk* の補文もこれと同じ種類の補文であると考えられる。

- (105) Pak guru menyuruh [s [s PRO untuk membersihkan
先 生 命令する 拭く
papan tulis itu]]
黒 板 その

(先生は黒板を拭くことを命じた。)

又、次のように、*untuk* 補文内に接語代名詞の形で動作主が示される形はできない。

- (106) *Pak guru menyuruh [s [s PRO untuk kubersihkan papan
先 生 命令する (私が)拭く 黒
tulis itu]]
板 その

(先生は私が黒板を拭くことを命じた。)

この例と、先の (105) の例を併せて考えると、この場合の ‘menyuruh’ の *untuk* 補文においては、動作主は任意の解釈を受ける形でなければならないという制限があると考えられる。

以上のことから、(103) の基底構造は次のようにあると考えられる。

- (107) [NP e] [VP [disuruhnya] [s [s PRO [VP [v untuk disalin]
[NP dongeng-dongeng tanah Banten] [VP ke dalam bahasa
Belanda]]]]

補文の中の ‘dongeng-dangeng tanah Banten’ は、動詞の受動形の後にがあるので、この位置では格の付与を受けられない。従って、この名詞句は主語の位置に移動せざるを得ない。しかし、この位置は PRO であるので、この位置でも格の付与を受けられないことになる。そのために、この名詞句は

最終的に主文の空である主語の位置に移り、そこで初めて格の付与を受けることになる。以上のような派生過程を経て、(106) の文が生成されたと考えられる。これまでのことを総合して考えると、untuk 補文の主語は PRO であって、PRO は文中の要素によってコントロールされるか、任意の解釈を受けるかの孰れかであることになる。この untuk 補文の持つ特性によって、次の文は排除されることになる。

- (108) *Pintu itu disuruh Pak guru untuk PRO kubuka
扉 その 命令される 先 生 私が開ける
bagi Amin.
～のために

(その扉は、アミンのために私が開けるように命じられた。)

untuk 補文の主語である PRO は、‘pintu itu’ と同一指示的となることはない。その理由は、先にも触れたように、menyuruh という動詞は C 型であるので、次の二文は意味が異なることになる。

- (109) *Pak guru menyuruh pintu itu untuk kubuka bagi Amin.

- (110) Pak guru menyuruh aku untuk membuka pintu itu bagi Amin.

そして (109) が (108) の基底構造であると仮定すると、それは、‘先生がドアに私に開いてもらうよう命令をした’ という意味の文になるからである。又、PRO が任意の解釈を受ける可能性も排除される。それは、PRO が随意的な解釈を受ける場合には、通常 me- 形の動詞が後に続くことになるからである。従って、補文主語の PRO は孰れの解釈も受けられないことになるので、その結果、(108) は非文となる。もし、次の文のように、この文の untuk 補文標識を supaya 補文標識で置き換えれば、適格な文となる。

- (111) Pintu itu disuruh Pak guru supaya kubuka bagi Amin.

しかし、次の形は不可能である。

- (112) *Pak guru menyuruh pintu itu supaya kubuka bagi Amin.
もしこの場合、menyuruh が C 型の構文を作っているとすると、(111) の文は、(112) が非文であることから、生成されないことになる。従って、(112) は、次の文とは異なる基底構造から派生したと考えなくてはならない。

(113) Pak guru menyuruh aku supaya membuka pintu itu
先 生 命令する 私 開ける 扉 その
bagi Amin.
～のために

(先生は、私にアミンのためにその扉を開けるように命令された。)

この文からは又、*aku* を主文の主語に立てた次の形も可能である。

(114) Aku disuruh Pak guru supaya membuka pintu itu
私 命令される 先 生 開ける 扉 その
bagi Amin.
～のために

(私は、先生にアミンのためにその扉を開けるように命令された。)

以上のことから考えると、(113) と (114) の基底構造は次のようにあると考えられる。

(115) Pak guru [vp [v menyuruh] [np *aku*] [s [s PRO supaya
membuka pintu itu bagi Amin]]]

これに対して、(111) の基底構造は次のような形であろうと考えられる。

(116) [np *e*] [vp [v disuruh Pak guru] [s [s PRO supaya
kubuka pintu itu bagi Amin]]]

この構造の補文に、*S* 削除と受動変形が掛ると次のようになる。

(117) [np *e*] [vp [v disuruh Pak guru] [s pintu itu supaya
kubuka bagi Amin]]

この補文は定形節ではないので、この位置では格の付与を受けることができない。従って、'pintu itu' は更に主文の空になっている主語の位置に移り、ここで初めて格の付与を受けることになる。

3. 3. agar 及び supaya 補文

untuk と同じく、*agar* と *supaya* も名詞的な補文を導く補文標識ではない。名詞的な補文である *bahwa* と違って、*agar* 補文と *supaya* 補文は、次の例に見られるように、主題化されることもないし、受動変形を受けるこ

ともない、又受動変形を受けることもない。

(118) *Supaya [Agar] saya memakan lebih banyak sayur, dokter

menasehatkan.
忠告する。

(私がもっと多くの野菜を食べるよう、医者は忠告した。)

(119) *Supaya [Agar] saya memakan lebih banyak sayur,

dinasehatkan dokter.
忠告された 医者によって

(私がもっと多くの野菜を食べるよう、医者によ
って忠告された。)

又、次の例に見られるように、両語とも、「～するように」の意味の副詞節
を導く接続詞としても使われるところからみても、これらの補文標識が導く
補文は名詞的でないと言える。

(120) Selama lima tahun, Ira dan Helmi menahan diri agar
～の間 5 年 抑える 自身
tidak sampai menulis sepucuk surat pun. (Mira W.,
Negative ～に到る 書く 一通の 手紙 も

Masih Ada Kereta yang Akan Lewat, p. 46)

(5年間、イラとヘルミは、我慢して、一通の手紙も出さなかっ
た。)

(121) Saat itu Lisa sedang menginap di rumah ayahnya,
時 その ～している最中 逗留する ～に 家 彼女の父
supaya ayahnya yang sedang gundah itu
彼女の父 Ligature ～している最中である 落胆しているその
terhibur. (Intisari No. 288, p. 33)

(失意の真っ只中にあった彼女の父の気持を慰めようと、リサは
その当時彼女の父の家に逗留していたところであった。)

agar と supaya は、次の例に見られるように、しばしば untuk と交代
可能な場合が多い。

(122) Buku itu disarankan oleh Pak guru untuk [supaya,

agar] kubaca.
私が読む

(その本は、先生が私に読むように提案した。)

しかし、agar と supaya は、untuk が使用されない所で、使用されることもある。例えば、次の例における supaya を untuk で置き換えることはできない。

(123) Pak guru menyarankan buku itu supaya kubaca.
先 生 提案する 本 その 私が読む

(先生は、私がその本を読むことを提案した。)

menyarankan (提案する) という動詞は、今述べた例のような形の他に、次のような形を取り得る。

(124) Pak guru menyarankan supaya saya membaca buku itu.

(125) Pak guru menyarankan saya supaya membaca buku itu.

(126) Pak guru manyarankan supaya buku itu saya baca.

(127) Pak guyu menyarankan buku itu supaya saya baca.

つまり、supaya は untuk と同じように補文の主語が PRO である場合とそうでない場合があり、補文主語が PRO である場合には、supaya の前にある名詞句が補文中の動詞に対して、意味上の主語であっても、目的語であっても、その文の意味に違いがない点において、menyarankan が作る構文は、B型の構文との類似を示す。

menasehatkan (忠告する) という動詞も、menyarankan と同様に、supaya 及び agar に導かれる補文を従える次のような構文を作る。

(128) Dokter menasehatkan supaya [agar] saya memakan lebih
医者 忠告する 私 食べる より
banyak sayur.
多くの 野菜

(医者は、私がもっと多くの野菜を食べるように忠告した。)

しかし乍ら、menasehatkan は、menyarankan とは異なり、補文の意味上の主語が supaya の前にある文は適格であるが、意味上の目的語が supaya の前にある文は非文となる。

- (129) Dokter menasehatkan saya supaya memakan lebih banyak sayur.
- (130) *Dokter menasehatkan lebih banyak sayur supaya saya makan.

以上のことから、menasehatkan は、menyarankan とは異なり、C型の構文を構成することが分かる。しかし、もしこの仮定が正しいとすると、次の文が適格であることの説明がつかない。

- (131) Lebih banyak sayur dinasehatkan dokter supaya saya makan.

しかし、これは、次のように考えれば解決されると思われる。即ち、(131) は(130)に受動変形が掛ることにより派生したのではなくて、次のような深層構造から派生したと考えられる。

- (132) [NP e] [VP [v dinasehatkan dokter] [S [S :PRO :supaya
saya memakan lebih banyak sayur]]]

つまり、(131) の深層構造は、補文の主語が最初 PRO であると考えられる。そして、この深層構造の補文に \bar{S} 削除が掛り、受動変形が掛ると、次のような構造になる。

- (133) [NP e] [VP [v dinasehatkan dokter] [S lebih banyak sayur;
supaya saya makan t_i]]

‘lebih banyak sayur’ は、この位置では、格の付与を受けられない。何故なら、その前にある V が受動形であるからである。従って、‘lebih banyak sayur’ は、格の付与を受けることができる主文の主語の位置に収まるところになる。こうして、次のような表層構造に到る。

- (134) [NP_i lebih banyak sayur] [VP [v dinasehatkan dokter] [S
 t_i supaya saya makan t_i]]

次に memerintahkan (命じる) と menyuruh (命令する) の作る構文の

違いについて見てみよう。

前節で、次のような文が非文になることを見た。

- (135) *Dia menyuruh surat itu untuk kukirimkan kepada paman.
彼 命令する 手紙 その 私が送る ～へ 叔父
(彼は、私がその手紙を叔父に出すように命令した。)

そしてこの文の *untuk* を *supaya* に換えた次の文も非文である。

- (136) *Dia menyuruh surat itu supaya kukirimkan kepada paman.
これに対して、*memerintahkan* を使った次のような文は適格な文である。

- (137) Dia memerintahkan surat itu supaya kukirimkan kepada
彼 命する 手紙 その 私が送る ～へ
paman.
叔父
(彼は、私がその手紙を叔父に出すことを命じた。)

又、*aku* (私) を *supaya* の前に出した次の形も可能であり、両文は意味の
違いがない。

- (138) Dia memerintahkan aku supaya mengirimkan surat itu
kepada paman.

更に又、(137) と (138) における主文の目的語である 'surat itu' 及び
'aku' を受動文の主語に立てた次のような文も可能であり、しかも両文の
意味は等しい。

- (139) Surat itu diperintahkannya supaya kukirimkan kepada
paman.

- (140) Aku diperintahkannya supaya mengirimkan surat itu
kepada paman.

従って、*memerintahkan* は *menyuruh* とは異なり、B型の構文を作ることが
分かる。*memerintahkan* と似ているがこれとは別の動詞である *memerintah*
(命令をする、支配する) は、*menyuruh* と同じく C型の構文を作るので、
(139) における *diperintahkannya* を *diperintahnya* で置き換えた次の文
は非文である。

- (141) *Surat itu diperintahnya supaya kukirimkan kepada paman.

次に, mengikhtiarkan (手を尽くす) と mengusahakan (努力する) を比較してみる。この両語は, 共に supaya 補文を取る。次の例を参照されたい。

(142) Akan saya ikhtiarkan sedapat-dapatnya, supaya saudara
～しよう 私 手を尽す 出来る限り あなた

dapat berangkat hari ini dengan kapal Ophir. (W. J. S.
～できる 出発する 今 日 ～で 船

Poermadarwinta, *Kamus Umum*, p. 371)

(あなたが今日オフィル号で出発できるよう出来るだけの手を尽くします。)

(143) Dia mengusahakan supaya saya dapat memperoleh
彼 努力する 私 ～できる 得る
karcis dengan harga murah.
切符 ～で 値段 安い

(彼は, 私が安い値段で切符を手に入れられるよう努力した。)

そして, 又, 両語共, supaya の前に目的語を取る次のような構文を作ることはない。

(144) *Dia mengusahakan karcis itu supaya kuperoleh dengan
彼 努力する 切符 その 私が手に入る ～で
harga murah.
値段 安い

(彼は, 私が安い値段でその切符を手に入れられるよう努力した。)

(145) *Teman saya mengikhtiarkan karcis itu supaya kuperoleh
友人 私 手を尽くす 切符 その 私が手に入る
dengan harga murah.
～で 値段 安い

(私の友人は, 私が安い値段でその切符を手に入れられるよう手を尽くした。)

しかし乍ら, この二つの例における supaya の前にある ‘karcis’ を主文の受動文の主語に立てた場合には, mengusahakan が使われている文は適格な文となるが, mengikhtiarkan が使われている文は非文となる。

(146) Karcis itu diusahakannya supaya dapat kuperoleh dengan

harga murah.

- (147) *Karcis itu diikhtiarkan teman saya supaya dapat kuperoleh dengan harga murah.

これは、mengusahakan は、基底構造において、補文主語が PRO である次のような構造も取ることができるのでに対して、mengikhtiarkan はそのような構造を取ることができないためであろうと思われる。

- (148) [NP e] [VP [v diusahakannya] [s [s PRO supaya kuperoleh karcis itu dengan harga murah]]]

この構造の補文に \bar{S} 削除と受動変形が掛ると、次のような構造が作られる。

- (149) [NP e] [VP [v diusahakannya] [s karcis itu_i supaya kuperoleh t_i dengan harga murah]]

しかし、この段階では、‘karcis itu’ の前の動詞は受動形であるので、‘karcis itu’ は格の付与を受けられない。従って、‘karcis itu’ は、更に、主文の主語の位置へと移動し、ここで初めて格の付与を受けることになる。こうして、次のような表層構造が得られる。

- (150) [NP_i karcis itu] [VP [v diusahakannya] [s t_i supaya kuperoleh t_i dengan harga murah]]

次に、meminta (頼む) について考えてみよう。meminta は次のように、supaya を補文として取り、しかも、補文内は能動文であっても、受動文であっても、意味の相違はない。

- (151) Pak guru meminta supaya saya membersihkan papan tulis
先 生 頼む 私 掃除する 黒 板
itu.

(先生は私に黒板をきれいにするよう頼んだ。)

- (152) Pak guru meminta supaya papan tulis itu saya bersihkan.
これらの形とは別に、meminta は、能動文の主語、或は受動文の主語が supaya の前に出た構文も作る。次がその例である。

(153) Pak guru meminta saya supaya membersihkan papan tulis itu.

(154) Pak guru meminta papan tulis itu supaya saya bersihkan.
そして、これら両文も意味が等しい。更に、これらの文において、supaya の前にある名詞句を受動文の主語を立てた次のような形も可能であり、こうしてできた両文も意味が等しい。

(155) Saya diminta Pak guru supaya membersihkan papan tulis
私 頼まれた 先 生 掃除する 黒 板
itu.

(私は、先生に黒板をきれいにするように頼まれた。)

(156) Papan tulis itu diminta Pak guru supaya saya bersihkan.
黒 板 頼まれた 先 生 私 掃除する
(lit. その黒板は、私がきれいにするように先生に頼まれた。)

以上のことから、meminta は、B 型の構文と同じく、supaya 以下の部分と、その前の名詞句とが一緒になって一つの文を形成していると言える。そして、meminta の構文のパラダイムは B 型構文のそれと完全に一致する。又、supaya の前の名詞句を移動させることができあるためには、believe の補文と同様、meminta の補文にも \bar{S} 削除が適用されると考えられる。今、例として(156)を取り上げ、この文がどのような派生過程を経て表層に到るかを観てみよう。 \bar{S} 削除と受動変形が掛った後のこの文の構造は、次のようなものであると考えられる。

(157) e [VP [v diminta Pak guru] [s papan tulis itu supaya
saya bersihkan]]

この段階で、'papan tulis itu' は、 \bar{S} 削除が適用されたために、その前の V によって統御されるが、V は受動形になっているので、それから格の付与を受けることができない。そこで、'papan tulis itu' は、空になっている主文の主語の位置へ移動し、そこで格の付与を受けることになる。'papan tulis itu' の移動後の構造は次の通りである。

(158) [NP_i papan tulis itu] [VP [P diminta Pak guru] [s t_i supaya

saya bersihkan]]

次に、日本語の「ように」補文及び「こと」補文を取る動詞について観てみる。「命令する」、「提案する」、「頼む」、「望む」は、「ように」補文も、「こと」補文も取るのに対して、「忠告する」、「努力する」、「手を尽くす」は、「ように」補文のみを取る。今、「ように」補文と、「こと」補文の両種の補文を取る動詞「望む」について、その補文中からの要素の取り出しについてみてみることにする。次に見られるように、「ように」補文と、「こと」補文は、補文内の主語を主題化することができる。そして、主題化された名詞句は対比の意味を持つ。

(159) 日本はもっとレモンを買うことを、アメリカは望んでいる。

(160) 日本はもっとレモンを買うように、アメリカは望んでいる。

「望む」は又、「～は～に～ことを（ように）望む」という文型にもなり得る。そして、この文型において、補文中の名詞句を主文の主題とすることが可能である。次例を参照されたい。

(161) レモンは、アメリカが日本に [s もっと ϕ 買うこと] を望んでいる。

(162) レモンは、アメリカが日本に [s もっと ϕ 買うように] 望んでいる。

「こと」補文標識は、第二章でみたように、名詞句補文を形成するので、次のように、補文全体を受動文の主語にすることが可能である。

(163) [s もっと 日本がアメリカ製の自動車を輸入すること] が望まれている。

又、次の(164)を受動文にして、しかも補文中の目的語を更に主題にすると、(165)が得られるが、この文は、あまりありそうもない解釈を含めると、二様に解釈されるために、認容度はかなり落ちる。

(164) 警察は、アメリカに [s 犯人を引き渡すこと] を強制した。

(165) ?犯人は、アメリカは、[s ϕ 引き渡すこと] を警察に要求された。

3. 4. ゼロ補文標識

menyuruh (命令する), membantu (助ける) は, 次の例のように, どこにも補文標識が現われない構文を作る。

(166) Amin membantu polisi mencari penjahat itu.
助ける 警察 捜す 悪い人

(アミンは, 警察がその悪人を捜すのを助けた。)

(167) Pak tani menyuruh anaknya mengambil cangkul.
農夫 命令する 彼の子供 取る 鍬

(農夫は子供に鍬を取ってくるように命令した。)

そして, この動詞の後を受動文にした次のような形は許されないところから, これら二つの動詞はC型の構文を作っていると考えられる。

(168) *Amin membantu penjahat itu dicari polisi.

(169) *Pak tani menyuruh cangkul diambil anaknya.

又, 主文の目的語を受動文の主語に立てた次のような文が可能であるのも, 英語のC型構文と共通する点である。

(170) Polisi dibantu Amin mencari penjahat itu.

(警察は, その悪人を捜すのをアミンによって助けられた。)

(171) Anak Pak tani disuruhnya mengambil cangkul.

(農夫の子供は, 農夫によって鍬を取ってくるように命令された。)

menasehatkan (忠告する) という動詞は, 前節でみたように, supaya 補文を取るが, 次のようにゼロ補文子を取ることもある。

(172) Dokter menasehatkan saya memakan lebih banyak sayur.
医者 忠告する 私 食べる より 多くの 野菜
(医者は私にもっと多くの野菜を食べるよう忠告した。)

(173) Dokter menasehatkan lebih banyak sayur saya makan.
医者 忠告する より 多くの 野菜 私 食べる
(lit. 医者は, もっと多くの野菜が私によって食べられるように忠告した。)

そして, この両文は意味が等しく, 又, 次のように, 動詞の後の目的語を主文の受動文の主語に立てた形も可能である。そして, このようにしてできた両文も意味が等しい。

- (174) Saya dinasehatkan dokter memakan lebih banyak sayur.
 (私は、医者にもっと野菜を食べるよう忠告された。)
- (175) Lebih banyak sayur dinasehatkan dokter saya makan.
 (lit. より多くの野菜は、私によって食べられるように医者に忠告された。)

従って、この場合、menasehatkan は B 型の構文を作っていると考えられる。

又、これまでの例とは別に、自動詞、或は自動詞の後に、ゼロ補文子に導かれる補文が来る場合がある。次はその例である。

- (176) Terdengar titik-titik airnya menimpa atap seng.
 聞こえる 粒 雨 打つ 屋根 トタン
 (雨粒がトタン屋根を打つのが聞こえた。)
- (177) Terasa badannya tidak enak.
 感じられる 彼の体 Negative 気持ちが良い
 (彼の体が具合が悪く感じられた。)
- (178) Terlihat seekor banteng datang hendak menyerangnya.
 見えた 一頭の 野牛 来る ～しようと 彼を襲う
 (彼を襲おうとして一頭の野牛が向かって来るのが見えた。)
- (179) Ternyata Amin mencuri intan itu.
 判明する 盜む 宝石 その
 (アミンがその宝石を盗んだことが判明した。)
- (180) Tampak Kasim berbaring di ranjang.
 見える 横たわる ～に 寝台
 (カシムがベッドに横たわっているのが見えた。)

そして、これら全てについて、動詞の後の補文の主話を、動詞の左に移すことができる。例えば、(176) と (178) にこの操作を施すと次のような文ができる。

- (181) Titik-titik airnya terdengar menimpa atap seng.
 (182) Seekor banteng terlihat datang hendak menyerangnya.

又、補文を受動文にして、その主話を動詞の左に移すことも可能である。例えば、(179) にこの操作を施すと、次のような文ができる。

(183) Intan itu ternyata dicuri oleh Amin.
宝石 その 判明する 盜まれる ～によって

(その宝石は、アミンによって盗まれたことが判明した。)

それでは、補文の主語であれば、どんな場合でも動詞の左に移すことができるかと言うと、必ずしもそうであるとは限らない。動詞によって、動詞の左に移る要素には、若干の制限が加えられるようである。

例えば、*terlihat* と *terdengar* においては、動詞の左に移る要素は、普通、不定名詞でなければならないので、次のような文は認められない。

(184) *Gendang itu terdengar dipukul beramai-ramai.
太鼓 その 聞こえる 打たれる 大勢で

(lit. その太鼓は、大勢の人によって打たれるのが聞こえた。)

(185) *Banteng itu terlihat datang hendak menyerangnya.
野牛 その 見える 来る ～しようとして 彼を襲う

(lit. その野牛は、彼を襲おうとして向かって来るのが見えた。)

一方、日本語では、「～のが聞こえた」、「～のが見えた」という構文においては、主語は定名詞でも、不定名詞でもよいが、「は」を取ることができないという制限がある。これは、一つには、「の」という名詞化する語によって、それに先行する部分全体が纏められるために、射程距離が長く、名詞句からはみ出す「は」が使えないことがある。二番目の理由としては、そもそも、これらの表現は、現象文に性格が似ていて、表現される文全体が新情報を成しているために、その文中の一部が「は」によって主題化されることができないということを挙げることができる。(184) と (185) に対して当てられた日本語の訳文が不自然なのもそのためである。次のように、補文の主語に「が」を取る形が適格な文である。

(186) 太鼓が大勢の人によって打たれるのが聞こえた。

(187) その野牛が彼を襲おうと思って向かって来るのが見えた。

同じように、「の」補文子を取る構文として、「～のを見つけられた」、「～のを捕えられた」があるが、こちらの方は、補文中の要素を主題化することができる。次例を参照されたい。

(188) 子供は、タバコを喫っているのを私に見つけられた。

(189) 太郎は、花子の財布を掏ろうとしているのを警官に捕えられた。又、主文が能動文であっても、次のように、補文中の主語を主文の主題とすることができる。

(190) その子供は、タバコを喫っているのを、私は見つけた。

(191) 太郎は、花子の財布を掏ろうとしているのを、警官は捕えた。

これに対して、terasa, tampak, ternyata は、左側に現われる要素は、定名詞であっても、不定名詞であっても構わない。次例を参照されたい。

(192) Mobil itu tampak menjauh.
車 その 見える 遠ざかる

(その車が遠ざかるのが見えた。)

(193) Sebuah mobil tampak menjauh.
一台の 車 見える 遠ざかる

(ある車のうちの一台の車が、遠ざかるのが見えた。)

参考文献

1. Chomsky, Noam (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht-Holland/Cinnaminson-U. S. A.: Foris Publications.
2. Emonds, Joseph E. (1970). *Root and Structure-preserving Transformations*. Ph. D. Dissertation, MIT. Reproduced by the Indiana Linguistics Club.
3. Lakoff, G. (1970). *Irregularity in Syntax*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
4. Nakao, Minoru (1973). *Seutential Complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
5. Ota, Akira and Kajita, Masaru (1974). 『文法論II』(英語学大系4). 東京: 大修館書店.
6. Rosenbaum, P. S. (1967). *The Grammar of English Predicate Complement Construction*. Cambridge, Mass.: MIT Press.